

桂田芳枝とは？

桂田芳枝(1911-1980)は、女性が大学に進学することが極めて難しかった戦前期、数学研究を志し、1928年に小樽高等女学校を卒業後、東京物理学校(1931~1934年)・東京女子大学数学専攻部(1938~1940年)を経て、1940年4月に北海道帝国大学(北海道大学の前身)の理学部数学科に入学しました。



▲ 理学部数学科の先輩・後輩と共に(1941年)
左より、桂田芳枝、上中雪、大杉富美子、今井昌子、渡邊雅

1942年9月理学部を卒業後は助手として籍をおき、数学第二講座(幾何学教室)の河口商次教授のもとで研究者の道に進みました。1950年7月には「高次空間の非ホロノム系に於ける展テンソルのオペレーションについて」の研究により、数学分野において日本では女性初となる理学博士の学位を取得しました。同年11月助教授に昇任し、1967年10月に教授となり、理学部の幾何学講座を主宰しました。北海道大学では女性初の教授であり、旧帝国大学では女性初の講座担任の教授の誕生でした。この間、位相幾何学の大家、スイス連邦工科大学教授のハインツ・ホップ博士(Heinz Hopf, 1894-1971)との共同研究など、微分幾何学分野で大きな研究成果をあげました。

1969年3月には大学院制度検討委員会委員に教授会で指名され、1973年6月からは北海道大学評議員も務めて大学運営にも重責を果たしました。1975年4月定年退官し、同年5月には女性初となる「北海道大学名誉教授」の称号が授与されました。北海道大学においてはもちろん、日本の女性研究者のパイオニアのひとりです。

桂田芳枝教授
1970年代▶



◀ 1950年代



北海道大学
ダイバーシティ・
インクルージョン推進本部
Office of Diversity, Equity,
and Inclusion

公式ウェブサイト
www.dei.hokudai.ac.jp



桂田芳枝賞授与式が挙行されました

2023年10月5日(木)に、本学事務局棟役員会室において「国立大学法人北海道大学桂田芳枝賞」授与式が行われました。

第1回目の受賞者となった、小川美香子教授(薬学研究院)、黒岩麻里教授(理学研究院)、滝沢侑子准教授(低温科学研究所)、樋田京子教授(歯学研究院)の4名に、寶金清博総長から顕彰状及び報奨金(目録)が授与されました。

寶金総長からは、各受賞者が学術上優れた研究を展開されていることはもとより、大学の管理・運営や若手・女性研究者への支援、中高生への進学支援等の活動に尽力した経験や功績が称えられるとともに、次世代の管理職等としての益々の活躍と、女性教員育成への貢献が十分に期待されることが、今回の受賞決定となったとお話がありました。そして、今後も教育研究に邁進し、本学の女性教員を代表するロールモデルとして、それぞれの立場でリーダーシップを発揮し、より一層の素晴らしい成果を挙げていただきたい、と激励されました。

また、授与式には、本賞の命名由来である桂田芳枝名誉教授の大姪にあたる廣中幸子様に来賓としてご列席いただき、本学ダイバーシティ・インクルージョン推進本部 部長の山口淳二理事、副本部長の矢野理香副理事が参加しました。会場には桂田芳枝先生所縁の品々が展示され、授与後は桂田先生の研究活動に思いを馳せながら、受賞者ら参加の皆さんによる懇談が和やかに行われました。



桂田芳枝とは？

桂田芳枝(1911-1980)は、女性が大学に進学することが極めて難しかった戦前期、数学研究を志し、1928年に小樽高等女学校を卒業後、東京物理学校(1931~1934年)・東京女子大学数学専攻部(1938~1940年)を経て、1940年4月に北海道帝国大学(北海道大学の前身)の理学部数学科に入学しました。



▲理学部数学科の先輩・後輩と共に(1941年) 左より、桂田芳枝、上中雪、大杉富美子、今井昌子、渡邊雅

1942年9月理学部を卒業後は助手として籍をおき、数学第二講座(幾何学教室)の河口商次教授のもとで研究者の道に進みました。1950年7月には「高次空間の非ホロノム系に於ける展テンソルのオペレーションについて」の研究により、数学分野において日本では女性初となる理学博士の学位を取得しました。同年11月助教授に昇任し、1967年10月に教授となり、理学部の幾何学講座を主宰しました。北海道大学では女性初の教授であり、旧帝国大学では女性初の講座担任の教授の誕生でした。この間、位相幾何学の大家、スイス連邦工科大学教授のハインツ・ホップ博士(Heinz Hopf, 1894-1971)との共同研究など、微分幾何学分野で大きな研究成果をあげました。

1969年3月には大学院制度検討委員会委員に教授会で指名され、1973年6月からは北海道大学評議員も務めて大学運営にも重責を果たしました。1975年4月定年退官し、同年5月には女性初となる「北海道大学名誉教授」の称号が授与されました。北海道大学においてはもちろん、日本の女性研究者のパイオニアのひとりです。

桂田芳枝教授 1970年代▶



◀1950年代



桂田芳枝賞について

「桂田芳枝賞」の命名由来となった本学名誉教授の桂田芳枝先生は、女性が研究者として志を高く持つことや女性が社会で活躍することが困難な時代に、自ら道を切り開いた先駆者でした。本賞は、桂田先生の功績を称えとともに、桂田先生のように本学の女性教員が意欲を持って教育・研究に邁進し、さらに社会発展に寄与する女性の次世代リーダーの育成につながることを目指し、創設しました。

本賞は本学に所属する女性教員(特任教員を含む)を対象に、学術上優れた研究を展開するとともに、次世代の管理職等として活躍することが期待される者に対し顕彰を行います。顕彰者は、部局長等からの推薦を以て厳正なる審査を行い、役員会の議を経て総長が決定します。

受賞者懇談会を行いました

桂田芳枝賞授与式後には、総長室において、資金総長を囲んで懇談会が開催されました。本学は女性の上位職者数が少ないという現状を踏まえ、女性研究者の増加と更なる活躍について、活発な意見交換が行われました。



黒岩先生からは、広報・社会連携本部の総長補佐としてのお仕事の経験から、プレスリリース等大学から発信される情報では、写真に写っている人物のほとんどが男性となっている現状を踏まえ、「北大が男性社会であることがアピールされてしまっていることから、構成のジェンダーバランスが重要であり、意識を変えていく必要がある。加えて、実質的にも女性や様々なダイバーシティを持つ方々が大学の運営に関わっていくことが重要」とのご意見が出されました。

また、小川先生からは、誰もが持つアンコンシャス・バイアス(無意識の偏見)について、「バイアスの影響を無くしていくためにも、数を増やすことが重要。また、職位が上がることによってマネジメント等の仕事が増え、研究に割ける時間が減ってしまうことをネガティブに捉える方もいるが、それは男性・女性に関わらず同じこと。数が増えることで解決されていくのではないかと」のご意見が出されました。

樋田先生からは、「男性教員とともに働く女性教員の数を増やし、プロジェクトなど一緒に仕事をする機会が増えることで、性に関わらず不要なバイアスは消えてなくなるのではないかと。男性も女性も、様々な経験値を積むことが自信や実績に繋がるので、次世代の研究者をサポートしていくことも非常に重要。そのためにも、サポートする側にも人数が必要となるので、数が重要」とのご意見が出されました。

滝沢先生からは、「パートナーの転職に伴って仕事を辞めざるを得ない場合や、産休・育休を機に第一線から退いてしまうといったケースがある。働きたい人が働き続けることができるような仕組みが必要。また、そもそも大学進学において男女格差や地域格差があるので、学びたい人たち皆の背中を押せるようなアクションも重要」とのご意見が出されました。

資金総長は、桂田先生の研究の歩みや、今年のノーベル生理学医学賞を受賞されたカタリン・カリコ氏の話に触れながら、研究者は研究に集中しなければいけない時期も確かにあるが、昔とは異なり、子育てや生活と両立させながら研究を継続していくことが重要であるとして、女性研究者の益々の活躍にエールを送られました。

特別展示 開催中

北海道大学大学文書館(北海道大学の歴史に関する資料を収集・公開する機関)では、賞の命名由来となった桂田芳枝の足跡を紹介する特別展示「数学者桂田芳枝が切り拓いた女性研究者の道」を2023年10月5日(木)から開催しています。“女性初”というトピックと共に語られることの多い桂田芳枝ですが、女性云々以前に、専門分野の研究で世界的にリードした数学者でした。

特別展示では、数学者として桂田芳枝が切り拓いた道を下記の5章の構成でたどります。

展示構成

- I. 理学部入学への紆余曲折 “数学好き”の歩み方
- II. 研究者への道 日本数学界で女性初の理学博士
- III. 数学界の“巨人”に出会う H.ホップ教授と挑むリーマン空間
- IV. 研究も、教育も、大学運営も 北大で女性初の教授
- V. 学問とは何か? フロントランナーからのメッセージ



特別展示では、桂田静枝・芳枝姉妹の旧蔵資料(大姪の廣中幸子氏から2023年5月に大学文書館が受贈した資料群)を中心に、大学公文書、沿革刊行物などもあわせて陳列しています。展示の会期・会場等は、以下のとおりです。

会期

2023年10月5日(木)~2024年8月5日(月)

日時

平日(月~金曜日)の開館日時 (9時30分~16時30分)に公開

会場

大学文書館 1階 沿革展示室 (札幌市北区北8条西8丁目)

問合せ

TEL/011-706-2395 次年度のオープンキャンパス開催日まで、大学文書館の開館日時に公開しています。是非、ご観覧ください。



2023年度 桂田芳枝賞受賞者

※受賞者は五十音順



大学院薬学研究院・
化学反応創成研究拠点 (ICReDD)
教授

小川 美香子 OGAWA Mikako

薬学博士(京都大学)。国立長寿医療センター、国立循環器病センター、浜松医科大学、米国NIH等を経て2015年より現職。この間、JSTさきがけ研究員・領域アドバイザー等従事ならびに日本薬学会学術振興賞等多数受賞。光・放射線を使ったイメージングおよび治療応用に向けた研究を行っている。



桂田芳枝先生のお名前を冠した賞をいただきましたこと、大変光栄に思っております。学生の頃は意識をすることが無かった性別を、年齢や職位が上がるごとに意識せざるを得なくなり、また、今歩んでいる道で良いのか考えることが多くなりました。一方で、研究が楽しいという思いはずっと変わりません。今回の受賞を励みに、自分が信じ作った道を歩みつつ、人口の半分を占める女性が、違和感なく組織で活躍するための素地を作っていければと思います。この度は誠にありがとうございました。

偉大な先輩である桂田芳枝先生の名を冠した賞をいただき、大変光栄に思います。私は生物の性決定の仕組みについて研究していますが、性の在り方は実に多様で柔軟です。そして自然環境が豊かであるほど、生物の多様性は守られます。つまり、多様であることは豊かさの証拠です。私は、大学も同様であると考えており、人々の多様性が守られ受け入れられる大学こそが真に豊かな大学で、世界の様々な課題に貢献できる大学だと思っています。桂田賞の名に恥じぬよう、真に豊かな教育・研究環境の実現に尽力する思いです。

大学院理学研究院
教授

黒岩 麻里 KUROIWA Asato

博士(農学)(名古屋大学)。日本学術振興会、北海道大学創成科学共同研究機構等を経て2016年より現職。生物の性が決まる仕組みや、Y染色体の運命について研究を行っている。アウトリーチの一環として一般書も執筆。2013年文部科学大臣表彰若手研究者賞受賞。2017年より総長補佐(広報)。大学運営にも従事している。



低温科学研究所
准教授

滝沢 侑子 TAKIZAWA Yuko

博士(環境科学)(北海道大学)。信州大学にて修士号を取得後、北海道大学へ進学。低温科学研究所 助教を経て2022年6月より現職。専門は地球生命科学・同位体環境生理学。生物圏における物質循環と、生物のエネルギーのやりくりについて研究を行っている。



大変光栄に思います!社会が発展していくにつれて、多様な人々が多様な生き方を選べる時代になってきていると感じます。大学が「高等教育機関」としての役割を維持しながら、その多様性を容許し、学生さんや教員・職員の皆にとって居心地の良い場所をつくるためには、新たに効果的な仕組みを作ること、そしてその運用法を確立することが必要です。各々の属性や境遇を「尊重」しながら、やりたいことを実現・達成できる居場所を作れるよう、これから尽力していきたいと思っています。皆様お力添えの程、どうぞよろしくお願い致します。

このたび桂田芳枝先生のお名前を冠した賞をいただき大変幸栄に存じます。先輩たちが切り開いてくださった道と周囲のサポートのおかげで、私は親として、また研究者としての人生を歩み続けることができました。あらためて感謝申し上げます。今後は桂田先生の精神を引き継ぎ、多くの方々と協力しながら、女性を含むすべての教員がのびのびと活躍できるような環境整備に尽力して参ります。そのことが研究成果向上につながることを皆さんとともに示して参りたいと思います。

大学院歯学研究院
教授

樋田 京子 HIDA Kyoko

歯学博士(北海道大学)。北海道歯学部卒、ハーバード大学医学部、北海道大学歯学研究科、遺伝子病制御研究所等を経て2018年より現職。この間、日本病理学会学術研究賞、日本女性科学者の会奨励賞等を受賞。腫瘍血管内皮細胞に着目したがん治療や新型コロナウイルス感染症重症化に関する研究を行っている。



謝辞

本号発行にあたり、北海道大学大学文書館 特定専門職 山本美穂子氏より、「桂田芳枝とは?」及び「特別展示開催中」の執筆、写真資料の提供にご協力いただきました。ありがとうございました。



CONTACT US



公式ウェブサイト
www.dei.hokudai.ac.jp



Email — office@dei.hokudai.ac.jp